2014筑波大学附属駒場論集54集

「科学者の社会的責任を考える」授業を作る

－フィールドワークの実践（第二期）―

（５年計画の３年次）

筑波大学附属駒場中・高等学校　社会科
大野　　新・小佐野浅子・小澤富士夫
早川　和彦・宮崎　大輔・山田　耕太
山本　智也

「科学者の社会的責任を考える」授業を作る

－フィールドワークの実践（第二期）―

（５年計画の３年次）

筑波大学附属駒場中・高等学校　社会科
大野　　新・小佐野浅子・小澤富士夫
早川　和彦・宮崎　大輔・山田　耕太
山本　智也

要約

８年前から始まった第二次スーパーサイエンスハイスクール（ＳＳＨ）の研究テーマとして、社会科では第一次に継続する「科学者の社会的責任」を掲げた。また、プロジェクト研究においても「『科学者の社会的責任を考える』授業づくり」を掲げた。2008・2009 年度は広島で実習を行い、原爆の学習を通して科学者の社会的責任を考えた。四年前からは新たに水俣で実習を始めた。本報告は、五年目に入った水俣実習の記録である。

キーワード：フィールドワーク　科学者の社会的責任　水俣　水俣病　社会科学習　ゼミナール

1　はじめに

過去四年間にわたって行われた「科学者の社会的責任」を考える水俣実習は、こちらの期待通りに生徒にとって大きな経験となっていることは、毎年実感するところである。水俣をめぐる問題については、四大公害病の一つであるとか、日本の工業化の負の遺産であるといった常識的な知識に加え、本校では中学一年時にテーマ的な学習として扱っている。生徒たちは実際にフィールドワークに参加することで、現地の様々な立場の人々から直接話を聞き、この問題についてより多角的に考え、科学と人間社会の関係についての理解を深めている。本報告では、本年度の実習の報告を中心に述べる。

2　実習までのゼミ実施概要

本校の高校２年生を対象としたゼミナールは、土曜日を使い、６月以降年間７回設定されており、１回について２～４時間を使うことができる。今年度の選択者は８名で、ほとんどが第一希望でこのゼミを希望したものであり、学習に対する熱意が強いものが多かった。

前述したように、多くの参加者は中学一年ですでに水俣の学習をしているのであるが、内容に大きな興味を持ったものの、学習の内容そのものはあまり残っていないようであった。よって水俣に関する学習から始めることとなった。

以下、全８回の授業内容について述べる。

第１回：　ガイダンス・水俣に関する総合的学習（１）〈5 月 31 日〉

本ゼミナールの概要を説明し、各受講者からの講座選択の動機を聞いた。

水俣病に関する学習としては、３冊のテキストを準備した。①『水俣を歩き、ミナマタに学ぶ』　熊本学園大学水俣学研究センター編　熊本日日新聞社　②『証言水俣病』　栗原彬　岩波新書　③過去２年間の本ゼミナール実施報告書　である。加えて、最近の水俣に関する新聞記事などを参考にした。

さらに映像を視聴した。「水俣病－その 20 年－（1976 年制作）」である。古い映像であるが、当時の時代状況を知るうえで好適と考え視聴することにした。水俣病発生当時の時代背景を含めた状況は、現代の生徒にとっては理解が難しいため、映像を見せることでその助けになるだろうと考えた。

さらに今年度のスケジュールの概要を示した。夏の実習前と後に大きく分け、それまでに準備とそのあとのまとめについてやるべきことを整理し、年間の学習活動のイメージをつけさせることを試みた。

第２回：　ガイダンス・水俣に関する総合的学習（２）〈６月 14 日〉

この日は２時間を使い、１回目の続き（水俣に関する学習）行った。まず「水俣病―その 30 年―（1987 年制作）」を視聴した。これは前回見せた 20 年史の続編であり、水俣病史を知る上で重要な作品である。続いて『水俣病小史』高峰武編　熊本日日新聞社　等を参考にして水俣病の歴史を振り返った。

第３回：　ガイダンス・水俣に関する総合的学習（３）〈６月 28 日〉

この日は４時間を使い、事前学習の深化と夏の実習の計画づくりを行った。前半の３時間で学習、最後の１時間を実習の準備に充てた。

事前学習では前述の課題図書①と②について、事前に担当箇所を指定したうえで、発表をさせた。昨年は各自読んでおくという指示を出すのみであったが、事前学習が生徒にゆだねられるため、中には読んでこない生徒も存在した。今回はすべての参加者がある程度書籍に触れ、知識を持ったうえで実習に向かえたと考えている。

後半のフィールドワークに向けた準備として、現地での訪問先の希望を調整した。今年度も実習のコーディネートをお願いした環不知火プランニングから訪問が可能な方々のリストが送られてきたので、これを検討しながら訪問先を決めた。水俣病資料館やＪＮＣ工場の訪問はこちらで決め、あとは生徒たちの希望に沿って決めていった。

3　水俣実習報告（宮崎大輔・早川和彦）

3.1　実習の概要

日程：2014 年８月 26 日（火）～29 日（金）
行き先：熊本県水俣市周辺
引率教員：宮崎大輔・早川和彦
参加生徒：高校２年生８名　計 10 名

3.2　主な行程

１日目	午前	鹿児島空港経由水俣入り
	午後	親水護岸・集落見学
２日目	午前	水俣資料館　百間排水口等見学
	午後	エコタウン工場見学
３日目	午前	ＪＮＣ水俣製作所見学
	午後	水俣病歴史考証館等見学
４日目	午前	熊本日日新聞社聞き取り
	午後	鹿児島空港経由東京へ

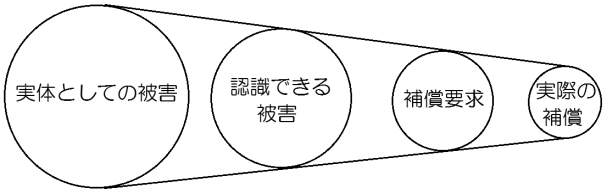
3.3　生徒が記録した実習報告

実際の実習内容については、生徒の報告書をもとに、主な訪問先とそこでの聞き取り内容を紹介する。(一部表現を修正した)

3.3.1　第一日目午後　総論・現地調査

鹿児島空港からバスで２時間、水俣駅に降り立った僕達を、「水俣病センター相思社」の遠藤邦夫さんと西和泉さんが迎えに来てくださった。水俣での最初のプログラムとして、遠藤さんから「総論」のお話を伺った。

水俣病は、公式確認から 58 年の月日が経った。しかし、まだ完全な「解決」には至っていない。そのうちの１つが、「補償問題」である。補償を求めて水俣病患者の認定を求める人々と、国・県・チッソといった加害者側の間の裁判闘争が今も終わっていないという。水俣病の「補償」の現状は、下図のような図で表すことができる。



このように、結果的に導き出された「問題に対する補償」は「すべての被害の実態」に比べ、様々な事情により、いわば「矮小化」されてしまっている、という事実がある。これは水俣病に限らず、様々な社会問題にも当てはまることだ。

・水俣病の「失敗」について

遠藤さんの話の中心にあったのは、「水俣病問題の中で人々は『失敗』をたくさんした」、ということだ。2011 年の原発事故以来、福島の人が「一度汚染された環境を復活させた都市」として水俣を訪れ、そのためのノウハウなどを聴きに来るというが、言う程のノウハウは無いが、水俣の「失敗」からなら学ぶことはありますよ、とおっしゃっていた。

では、その「失敗」とは何だろう。勿論、加害企業のチッソは「有機水銀を『しかも途中から原因があるとわかっていながら』流し続けた」という大きな「失敗」を犯した。だが、失敗を犯したのはチッソだけではないのだ。「官民」の言葉でいう「官」の責任も大きい。

国は、高度経済成長期という背景からチッソの工場稼働を優先させた。熊本県は、化学工場を監督すると

いう権限を持ちながら排水を止めなかった。水俣市は、市に欠かせない存在であったチッソとの兼ね合いから水俣病患者に対するバックアップを十分になさなかった。これらのことは、法的にはそうでなかったとしても、少なくとも倫理的にはおかしいことであった。
これは、高度経済成長期という時代背景にもよるものであると思う。チッソは当時の経済成長を支えていた企業であったという事実が、なおさらに問題を複雑化させている。

そして最も根深いかもしれない「失敗」が、「市民の対立」である。チッソから補償金を得たい「水俣病患者」と市のためにチッソを守りたい「水俣市民」という争いの構図もあった。「水俣市民」陣営に患者がいたこともあり、この問題は特に複雑さを極め、水俣の人々の心に深い傷を残した。最近になって「もやい直し」（後述）が進み、改善が図られている状況である。

僕達は、
①どうして対話ができなかったのか
②どうしたら敵対に至らずに済んだか
③ここで「水俣の失敗」とは
ということを考えた。結果、「利害の完全な不一致」「団体の分裂」「仲立ちをする第三者の欠如」など様々な理由が挙げられた。相思社の方々の協力を受け、全ての意見を次ページの表にまとめている。

このような水俣病の様々な「失敗」が今の状況を生んでいるという事を知り、僕たちは環不知火プランニングを後にした。
右写真：グループワークの様子
グループワークをまとめた表は、次ページに掲載する

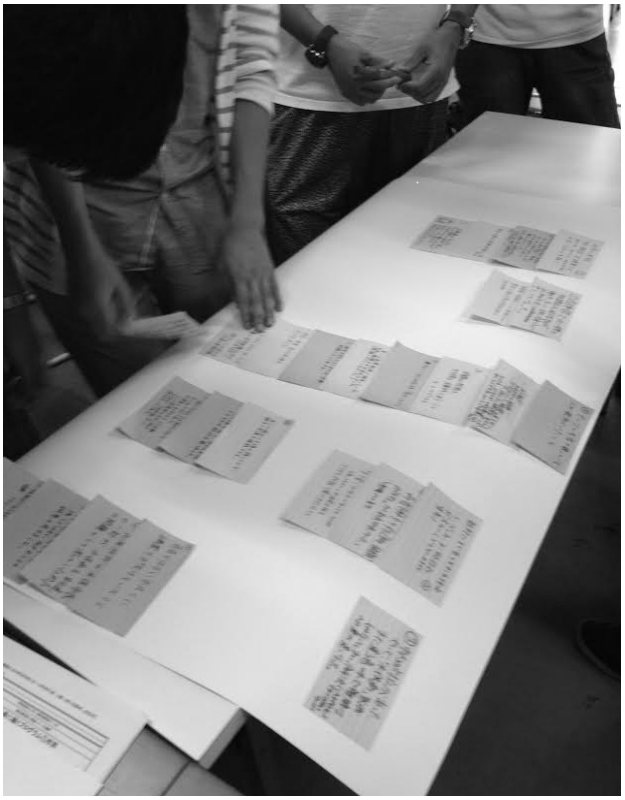
・西 和泉さん 【現地見学】

環不知火プランニングでの「総論」が終わった後、僕たちはタクシーに乗って水俣病患者の多発した集落を 2 つ周った。

・坪段

最初に有機水銀が垂れ流された、言わばすべての「爆心地」であるチッソの百間排水口に極めて近いこの集落。ここは、1956 年に患者が初めて公式に確認されたところである。最初の患者は 5 歳と 2 歳の姉妹で、妹は幼くして亡くなってしまったという。また、小さな集落ということもあり感染者に対する「村八分」もあったというが、最終的に集落の中で水俣病の症状がなかった人はたったの 4 人であったというから、恐ろしい。

もちろん水俣病の事実が明るみに出ると一帯の漁は禁止となったが、当時は今以上に漁業に依存した生活



を送る人が多かったためにこっそり漁をしていたという話もある。

なお、海は 1997 年に安全制限が出され、きれいな海になっている。漁獲量は増えないが、釣り客は来るようになったという。僕達が見学していると、岸辺には網や蛸壺といった漁業用具があり、今では一見普通の漁村といった雰囲気を感じた。

また、前述の「市民同士のいさかいをなくす」いわゆる「もやい直し」と呼ばれる運動で、坪段でもかつて仲たがいしていた人達の間で言葉が交わされ始めている。

・湯堂

坪段から 1km ほど南へ行った場所に、また 1 つ集落「湯堂」がある。湯堂は坪段よりも明らかに大規模な集落だ。ここでも、認定されているだけで 160 人以上の患者がいる。また、胎児性水俣病患者が多数生まれた地としても特徴的だ。

明治期、チッソができてから天草からここに移住してきた、という人も多いという。そういう人たちも「島んもん」と蔑まれたという話であるが・・・・。水俣というとどうしても「海」のイメージだが、すぐ後ろに控える山はみかんが収穫されているというように、農業をしている人も多い。海も、澄んでいてとてもきれいであった。保全林として保護されているまだ手つかずの場所も多く、そのような場所が魚のたまり場に

団体分裂	・患者側と市民側の「統一戦線」を構築できなかった。（とはいえ、何を求めるか統一するのは困難）
	・チッソから「誠意ある対応」を求めるためには、住民と患者で一枚岩になっておく必要があったにも関わらず、内部でのいがみ合いに徹してしまった⇒チッソ側が仮に誠意ある対応をしようとしても、相手が仲間割れしていたらどうしようもない
	・市民の間で分断が起こった
	・水俣病の解決という目的に向かう者のプロセスを選ぶところで分裂してしまい、最後まで協力できなかった
個人無視	・各陣営での一種の「同調圧力」のようなものが働き、互いに話し合おうという人物が出てきにくくなった
	・患者側・住民側といった団体としての意向に、個人の考えが飲み込まれてしまった
第三者の欠如	・コーディネーター的役割が居ない。（できない時代背景）
	・両者を仲立ちする人物、組織（影響力のある）の存在があれば良かった
	・第三者（水俣市であっても、その他であってもよい）が両者の間をとりもち、対話へ導けなかった
問題の複雑化	・市内の対立があったせいで、「水俣病」が違う意味で複雑なものになってしまい、解決（これは何をもってするかは解らないが）への道が遠くなった
誠意の欠如	・市民側に謙虚さが欠けていた
	・市民側の一部が、水俣病を自分達の問題として考えていなかった
	・チッソ側が応じないの一点張りで、多少なりとも誠意を見せることがなかった
	・市民側が、「チッソを守るため」という考えを表面化させなければ、対立でおさまったのかもしれない
巡り合わせ	・巡り合わせが悪かった
利害の不一致	・病気を認めてしまえば、チッソの企業利益に大きく反するという事実があった
	・「利益の共有」と「対話の存在」の確認をし続けることができなかった
	・お互いに自己の利益を第一に優先にしてしまった
	・市民・患者・互いの立場を少しでも考えていればよかった
	・チッソに生活を頼っている人が数多くいた
	・それぞれの団体が求めていた補償の違いや、仮にその補償がもらえたとしても、どちらかの利益しか獲得できないということが考えられた
	・互いの利害関係が相反していたため、議論がかみ合わなかった（議論をしようとする動きがなかった）
	・目的の違い（患者側→補償（チッソはつぶれてもよい）、市民側→チッソの存亡は水俣の死活問題）
	・患者側：自分達が受けた被害を最も重要と考えた⇔市民側：自分達が受けた被害より、水俣が受けた被害を重要と考えた
	・自分達の利益だけではなく、問題全体の解決に向けた取り組みが必要だった
二元論	・互いに関わりを深く持つことで、相手の立場を理解する・させることができなかった
	・互いに認める／認めないの二元論であり、多少の妥協でもそれは敗北を意味してしまうという事態に陥った
	・双方の陣営がどちらも「自分の住んでいる（あるいは応援している）水俣の町をできる限りよくしようと考えた上での結論を掲げており、その自分の考えに固執してしまった
平和的話し合いの欠如	・双方の陣営ともに、「水俣病患者が減る、いなくなる」ことを求めている点という意味では同じであったので、意見のすり合わせを、ビラ合戦という感情的な方法に訴えるのではなく、平和的話し合いに持ち込むべきだった

なりよい漁場になるという。

こちらも今ではのどかな場所であるが、ここで半世紀前に起きたことはまだ消えていないし消えることはないのだろう、と感じた。

・まとめ、考察、感想

この日、僕(含めゼミ生全員であろう)は初めて水俣の地に降り立ち、被害集落を含む市内各地を見学した。月並みな言葉だが、「やはり実物は違う」という事に尽きる。本やインターネットの中の写真で見るに留まっていたものが眼前に現れるということの重みを改めて感じることとなった。一つの象徴として、「海」がある。やはり、海は広い。これは、写真ではわかりにくいことだ。これだけ広い海が、人に健康被害が出るまでに汚染されたという事実を否応なしに実感させられた。集落や工場といった人工の構造物も然りである。

遠藤さんの「総論」を聞いていて、考えたことは、この問題は現代の日本の様々な事柄にもあてはまる点が多々あるということだ。これといった具体例を挙げられるわけではないが、水俣で見られたような「対立」やいわゆる「お上」の性質、そして「補償」といった個々の問題は、決して水俣病問題だけのものではない。勿論時間の流れもあって細部に大なり小なりの違いはあるだろうが、この水俣病の問題は単なる「公害」ではない、様々な社会現象へと一般化できうる非常に重要なものである、と思った。これの「失敗」を考えるという事は、社会全体の解決策への糸口を模索していく事に通じるものがあると僕は考える。

ユーモアを交えた軽快な語り口の奥に、何というべきか「信念」を感じた総論であった。

（担当：田原大嗣）

3.3.2　二日目午前①　資料館・排水口他

・概要

フィールドワーク２日目に、僕たちは百間排水口、親水護岸や水俣病資料館などをまわりました。ここでは、水俣病資料館でお話を伺った杉本雄さんの話を中心にまとめたいと思います。

・「爆心地」百間排水口

まず、いわゆる「水俣病の爆心地」である百間排水口について述べたいと思います。

この排水口ではかつて有機水銀の含まれたチッソのアセトアルデヒド工程の排水が流されていました。しかしチッソ専用の排水口という訳では無く、水俣市の家庭排水も流すということです。

先程「有機水銀の含まれた」と書きましたが、実際に排水中に含まれていた水銀には、量的には無機水銀の方が多かったそうです。しかし、その危険度は圧倒的に有機水銀の方が高いのです。

昔水俣病のことがよく知られる前には、「船を百間排水口に止めておけば船の底に藤壺などがつかない」という笑えない話もあったようです。

実は、この排水口は今も市の排水口として使われているということです。水俣湾まで細い水路がつながっています。また、排水口の周りの、特に埋立地側には新しい住宅も多くみられます。

百間排水口のすぐ近くには「一番札所」というものがあります。これは、新潟水俣病の患者の方が作ってくださったそうで、本当は 88 カ所作りたかったのですがこの一番札所しかない、ということです。新潟は水俣よりも水銀対応が早く、妊婦にも「子供を産むな」と指導し、胎児性患者の発生もごく僅かにとどめました。

・杉本雄さんの語る「水俣病のこれまで」

ここで、資料館語り部の杉本さんの話してくださった、水俣病のこれまでをまとめます。

杉本雄(すぎもと・たかし)さんは1939年生まれで、1981年に水俣病認定された方です。今はいりこ作りに従事していらっしゃって、手に入れるのが難しいほどの人気だということです。

小学校高学年の頃は「水俣にチッソがあるのは当たり前」であり、チッソを「会社」とみるような意識は無かったそうです。

水俣病が発生し、患者が多数発生するようになると、多くの患者が当時規模の大きかったチッソ附属病院に押しかけました。「子供を見捨てるのは医者としてのプライドに関わる」ということで、細川院長は水俣保健所に届けを提出しました。すると、保健所は即座に県水産課に水俣湾の漁獲禁止を求めたのです。つまり、市や国は「水俣病の原因は水銀である」と分かっていたのにもかかわらず、市全体・国全体でそれを隠し通し、表に出さなかったということになります。

県はこれに対し、「水俣湾にいる魚全体が汚染されているとは限らないから漁獲禁止にできない」という論理によって漁獲禁止を拒否しました。杉本さんは、「1956年に漁獲禁止にしていたとするならば、おそらく患者は50〜60人で済んでいただろう」と考えてこの時の対応を批判していらっしゃいました。

こうして漁獲禁止をしなかった結果、昔から魚を多く食べていた水俣漁民は、危険だと頭で分かっていても魚を食べてしまいます。「ピチピチして元気な魚だから大丈夫だろう」「頭と内臓はとったから大丈夫だろう」「仮に水俣病にかかっても、その時には野菜でも食べていればいずれ治るだろう」。どれも水俣病というものをよく知らないがために発生した勘違いでした。

また、水俣には胎児性水俣病の患者の方が多くいらっしゃいます。これは、母親の乳しか飲んでいない子供にも水俣病の症状がみられることから、原田正純医師の研究により、これまで胎盤が毒物を通さないと思われていたのが誤りで、水銀は通してしまう、ということが分かった、というものです。

当時の水俣には、「肝臓が悪いならナマコを食べろ」、「アトピーならマグロを食べろ」といった一種の民間療法のようなものがありました。その中の一つに、「妊娠したなら地ガキを食べろ、そうすればお乳がよく出るようになる」というようなものがありました。この療法の結果、妊娠中の母親がわざわざ有機水銀で汚染された地ガキを食べることになり、胎児性水俣病が拡大してしまった原因になってしまったと考えられています。

さすがにチッソもこのまま対応しないわけにはいかず、サイクレーターというものを設置しました。この水浄化装置で有機水銀は除去できるというもので、チッソ幹部はこのサイクレーターを通したという水をコップ２杯飲んで見せました。ところが、後に内部告発によってこれが嘘であり、チッソ幹部が飲んだのはただの水道水であったということが分かったということです。

「チッソの排水を止めろ」という陳情をしても、チッソが無くなった場合の経済的な影響を考えて、市民の多くが「止めるな」という真逆の陳情をしてしまっており、意味をなしませんでした。

・水俣病裁判と補償問題

杉本さんが裁判を始めると、親兄弟をチッソが動員し、あの手、この手で裁判をやめさせようとしました。実際にそれに負けて、裁判を取り下げていく人もまわりにいたということです。しかし、杉本さんは裁判取り下げについて、「そんなことをすれば元の木阿弥だ」と考え、裁判を続行しました。

裁判が終わっても、今度は補償問題が生まれました。補償協定をどのような条件で結ぶか協議されましたが、「ああでもない、こうでもない」といってなかなか話はまとまりませんでした。

・水俣病における国の責任と風評被害の問題

杉本さんのお話の中で、ひしひしと伝わってくるのは「国、県などの行政への怒り」でした。チッソの責任も重いが、それ以上の責任が行政にあると考えられていらっしゃいました。

最初に水俣病になったのは漁民の子供でしたが、そのことに関して杉本さんは今こう考えていらっしゃいます。「もし最初に水俣病にかかったのが大臣の子供だったら、どんなに違っただろう」。国などの水俣病への対応の遅れ、水俣病患者への差別などを思って出た考えなのだと思います。

国の対応が後手後手になっているのは今も変わらないと杉本さんはおっしゃいます。それは、東日本大震災の後の福島第一原子力発電所事故への対応の悪さにもみられるということで、水俣病資料館に設置されていた福島特設コーナーに寄稿されていた杉本さんの文章にも、その点に関して行政への怒りがにじみ出ていました。ほかに掲載されていた多くの方も、「風評被害」の心配をしていました。福島産の農産物はいまも売れない状態にあります。かつて水俣でも、サッカーの試

合などで「水俣病がうつる」などの発言をされたという風評被害の経験があります。この経験を生かしてもらいたいものだ、と書いていた方もいらっしゃいました。

・水俣病総合研究センター/資料館/環境センター

杉本さんのお話を伺った水俣病資料館の周りには、水俣病関連の施設が充実しています。

水俣病総合研究センターは国立の施設で、世界の水銀汚染事例を紹介したり、毛髪水銀量を測定したりしています。その展示の中で最も印象に残ったのは、当時水俣の人たちが食べていたという魚の量を示した食事の模型です。おかずとして用意されていた刺身はお皿に山盛りでした。このような生活をしていたので、魚が汚染された時の影響は甚大なものであったのでしょう。その後に「魚を食べるのはやめろ」と言われてもつい危険を冒して食べてしまう理由も分かる気がしました。

総合研究センターから水俣病資料館へつながる連絡通路には、水俣病に関連する写真などが多く掲げられていました。あらかじめビデオなどで見ていたとはいえ、水俣病患者の方の写真を見ると、どうしてこのようになってしまったのか、という悲しみや怒りの混じった気持ちにさせられました。

水俣病資料館は市立の施設で、総合研究センターよりもより突っ込んだ内容の展示が多かったように思います。今回僕たちが杉本さんの話を伺ったのはここの語り部講話ですが、これは１日２回程度実施されています。

僕がここで特に印象に残った展示を２つ紹介します。

１つ目は、新聞記事を抜粋して水俣病の解決への流れを解説したパネルです。抜粋された新聞は朝日、毎日などの全国紙から、熊本日日新聞などの地方紙まで幅広くありました。一部を引用します。

1996「環境庁長官『申し訳ない』」
1997「水俣湾魚介類の安全宣言」
1997「仕切り網　9月末撤去へ」
2004「水俣病　国、県に責任」
2011「水俣病　最大訴訟が和解」

これは見出しだけですが、それでも解決の流れが非常によくわかる良い展示だったと思います。

2 つ目は「もやい直し」に関するパネルです。そもそも「もやい直し」とは、もともとは船と船をつなぎ直す、といった漁師言葉でした。それと同じように、当時いがみ合っていたチッソ労働者側と水俣漁民側の対話をすすめることで、心をつなぎ合えるようにしよう、という試みが行われています。吉井水俣市長が、水俣病に対する市としての責任を反省したりもしたということで、対話が大きな成果を上げ、かつてのわだかまりが解消されればよいと思います。

さらにこの 2 施設の近くに、県の環境センターがあります。この施設では、水俣のごみ 24 分別についてなど、水俣のめざす「クリーンなまち」作りが大きく取り上げられていました。

・親水護岸

先程から水俣市の「水俣病のあとの町作り」について見てきましたが、その象徴ともいえるであろう場所が親水護岸です。

親水護岸は水俣湾の埋め立て地に作られた護岸で、近くには野球場や「実生の森」（在来種を植えた森）なども作られて「エコパーク水俣」として整備されています。

どこにでもありそうな、海と親しめる護岸ですが、しかし他とは大きく違う点があります。この護岸の下には、水俣病をもたらした有機水銀の含まれるヘドロが眠っているのです。つまり、親水護岸は水と親しむという目的だけでなく、有機水銀を除去しきれいな海

を取り戻す、という使命もあるのです。

ところが、このヘドロ埋め立ては寿命が短く、あと20～30年で寿命を迎えてしまうと言われています。今後どのようにこのヘドロを処理するのか、未来の水俣市に託された問題だと言えます。

一番近くには恋路島という島が見えます。この島は、今は無人島ですがかつては孤児院や海水浴場があったということです。これらは水銀汚染の影響でなくなってしまったようです。しかし、島は再度注目を集めており、昔あった遊歩道の再開拓、さらには橋をかけてしまうなどといった案もあるそうです。

ほかにも、坪段や湯堂などの患者多発地帯もこの親水護岸から見ることができます。

また、この親水護岸には慰霊碑もあります。「不知火の海に在るすべての御霊よ/二度とこの悲劇は繰り返しません/安らかにお眠りください」と書かれたこの慰霊碑は2006年に完成し、亡くなった方の名簿が中に入っているということです。しかし、実際には亡くなった方のおよそ3分の1程度にあたる500人ほどしか入っていないそうです。

水俣病公式確認日である毎年5月1日には大臣や県知事、近隣市長が集まってここで式典を行います。

慰霊碑の周りには JICA の外国人の方が作ったという、魚や貝の形の赤茶色の素焼きが置いてありました。

その横にズラズラと並んでいる石があります。これが魂石で、「本願の会」によって設置された、患者が死んでも忘れられないように、というメッセージが込められた石像です。そのため、石像は海の方向を向いており、全部で52、3個あるということです。

親水護岸は、何も考えなければ海に親しめる良いスポットだと思います。しかし、水銀がこの下に埋まっていると考えると……。色々と思うところがある、考えさせられる場所なのではないでしょうか。

・感想とまとめ

杉本さんのお話をお聞きしたうえで資料館の展示を読むと、加害者、被害者の二項対立的思想の浅さを実感しました。さらに、他の日にも多くの方のお話を伺い、様々な意見の違いが今もあり、問題はさらに複雑なのだと痛感しました。

そして何より感じたのが、「水俣病の真実を発信する必要がある」ということです。

フィールドワークが終わったのち、一時金支給問題について「水俣病 3.2万人に一時金支給」(8月30日、毎日新聞）というニュースをインターネット上のニュースサイトで読みました。このサイトにはコメント欄があり、それらを眺めてみたところ、水俣病について勘違いをしているのだろう、よく知らないのだろうというコメントが多くありました。決して悪意のあるコメントではなく患者のことを考えたコメントであるのに、勘違いゆえ患者の方を傷つけてしまいかねないものもありました。

水俣病が世間一般に広く理解されるようになるにはまだ時間がかかるのではないか。これが僕の出した結論です。水俣病発生から50年以上の月日が経ちましたが、一度も広く理解されることなく、国は無理やり問題を解決しようとしている、ともいえるかもしれません。私たちはこの現実を正視しなくてはならないのではないでしょうか。　　（担当：野口雄暉）

3.3.3　二日目午後　田中商店

・田中商店から見た今の水俣

現在水俣はエコタウンに属していて、日本にある26エコタウンのうち最南端に位置している。エコタウンとは、「ゼロ・エミッション（ある産業から出る全ての廃棄物を新たに他の分野の原料として活用し、あらゆる廃棄物をゼロにすることを目指すこと)」を位置づけ、

先進的な環境調和型のまちづくりを目指している制度のことで、水俣でも瓶の回収やゴミ分別の徹底などが行われている。因みにエコタウンになるためには、環境省と経済産業省の共同承認を得ないといけないという決まりがある。

・なぜエコタウンになったのか？

水俣市が積極的にエコタウン化を行っていったのは、やはり「基盤としての水俣病」があったからである。四大公害病の一つである水俣病が発症した地域として、二度とあの時のような過ちは繰り返さないという強い意識の表れであると私は考える。住民にエコタウンが受け入れられているのも、やはり根本に水俣病があるからだと思う。

一部の説として、焼却炉が使えなくなった際にエコタウンの話が持ち上がったという説があるが、これはあくまで噂であろう。

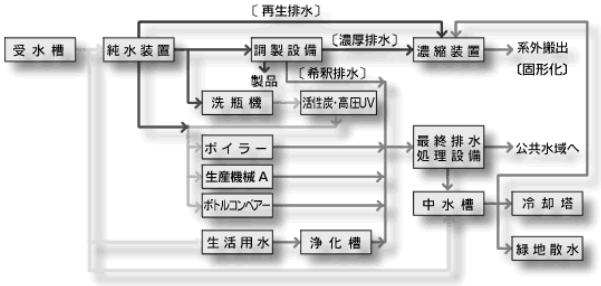
・4R

普段私たちが耳にしている 3R は、「リデュース」「リユース」「リサイクル」の頭文字をとったものであるが、水俣では 4R を目指している。上の 3 つに「リフューズ」を加えたものが 4R であるが、上の 3 つがいわゆる「物を使った後」の対策であるのに対し、「リフューズ」は「物を使う前」の対策だというところが面白いところで、今後はこの「リフューズ」が大事な観点になるのではと思う。

・リグラスロード

リグラスロードとは使い終わった瓶を細かく砕き、一粒ずつ角の尖りをなくし、それをアスファルトの道に混ぜたものである。瓶のかけらを混ぜることの利点としては、地元の人から気に入ってもらえたり、夜に光ったり、透水性に優れていることなどが挙げられる。因みに「リグラスロード」という名前は田中さんがつけたものらしい。何とも言えぬ落ち着いた感じの中に子供っぽさを残すことで、「「エコタウンを次の世代につなげていく」」という思いがひしひしと伝わってくる素晴らしい名前になっている。

・工場見学



上の施設紹介は私たちが見学したものではないが、だいたいこのようなものであると思ってくれればいいだろう。

下の写真は水俣の洗瓶工場内のもので、細かい「傷」や「割れ」があるものは人の手で処理がおこなわれている。

工場の外には瓶が山の積まれているわけだが、瓶を入れる箱の色でどこから回収された瓶であるかわかるのだ。例えば緑の箱は「九州 P 箱」と呼ばれ、九州のみでシェアされているものである。

この瓶の山の中に東京から来ている瓶がある。そもそもこのように瓶を扱う職業は瓶商と呼ばれ、全国に存在するのだが、東京にももちろん存在する。ではなぜ水俣に東京の瓶があるのか？？、、、と疑問に思ったのは自分ではなく宮崎先生なのだが、ここでは自分ということにしておこう。理由は東京の瓶商仲間に送ってもらっているということらしいのだが、もうちょっと面白い回答があっても良かったと思う。

・海から見た水俣

初日のようにタクシーでの移動だと、水俣の集落はいっけん山で区切られているような感じを受ける。水俣の地図で見た認識と、実際に行って陸地から見た認識は全く違った。だが海からみた水俣の認識というものは、自分の認識をまた違ったものにした。水俣病はチ

ッソの工場排水に含まれた有機水銀が、プランクトンから魚へ、そして人間へと濃縮されたことによっておこった公害病であり、海という環境が水俣病の発生、そして拡大の大きな要因となったことは言うまでもない。その海から見た水俣は小さく、そして公害病が起こりやすい地形であった。不知火海は「総面積 1,200 平方キロメートル、閉鎖度指数 32.5 であり、日本の 1,000 平方キロメートル以上の内湾では最も閉鎖性の高い海域である。平均水深は約 23 メートル、最大水深は八幡瀬戸で約 73 メートル、南部では 20-50 メートル、中部では 30-50 メートル、北部では 20 メートル以浅である。」というように、日本の閉鎖性海域にも指定されるほど水の出入りが少ない海である。普段はその地形の影響で波の静かな穏やかな海であるがゆえに、公害はあまりにも皮肉な話だと思った。

水俣病により今でも不知火海の魚の総量は減ったと言われ、漁だけを仕事にしている専業漁師の数も減ったなか、杉本さんの魚付林の話は胸に響いた。水俣病当時まだ子供だった杉本さんだが、魚付林を語るその瞳には水俣病当時の海がうつっていた。

・僕だけの水俣

このタイトルについて

「水俣病とは何か？」

「チッソの対応は間違っていたのか？」

「何をどうすれば水俣病が起こらずにすんだのか？」

そんなことははっきり言って自分にはわからない。自分は専門家でもなければ、この水俣に骨をうずめる覚悟もないただの高校生である。だが水俣の地を実際に踏みしめ歩いた 3 日間、自分は自分でしか感じえない水俣病を感じ取れたはずだ。自分が語る「水俣病」は教科書のような万人受けするものではあってはならないとおもった。伝えなければならないものは言葉を選んでいてはいけないのだ。だからこそ、まとめのタイトルは「「僕だけの」水俣」なのであり、それ以外ない。

水俣は生まれ変わりたいのだろう。エコタウンとしてクリーンな街づくりを展開し、水俣病のイメージを少しでもなくそうと、「マイナスな田舎町」を「普通の田舎町」に戻そうとしている。それはいいことだと思う。いつまでも「水俣病のあった水俣」とみられるのは、町にとって大きなデメリットであることに間違いはないのだから。

水俣病は歴史に向かって進み、いつしか歴史の一欠片に落ち着く。それが 100 年後なのか 200 年後なのかはわからないが、仕方のないことだ。当時多くの戦死者をだした太平洋戦争を日々思い返し、あのようなことは二度と起こってはならないと思う人が、この現在の日本に何人いるだろうか。皮肉なことに歴史とはこのようなものであり、だからこそ歴史なのである。

なら水俣病が歴史になった時と、水俣病が解決した時はイコールなのか？

それもまた違う。

水俣病の本当の解決が「水俣病の症状があるすべての人が、症状を克服し、健全な体に戻ったうえ、保証金を必要な額支払われた時」とするならば、そんな時は絶対にめぐってはこない。つまり水俣病に完全な解決などないのだ。

自分は水俣病の答えを探しにゼミに参加し、見つけた答えがこれだ。これを皮肉と言わずしてなんというのだろう。

水俣の人が、「水俣病」という負の過去を背負い続けるのは不当であり、すぐにでも投げ出したい気持ちも痛いほど理解できる。だが、「歴史」として水俣病を捨て去って水俣市民の笑顔が見られたときにこそ、日本は 1950 年代に逆戻りをするのだ。

（担当：石田芳仁）

3.3.4　三日目午前①　ＪＮＣ水俣製作所

創業者野口遵は石川県出身の人物である。彼は電気の事業に非常に長けており、南九州の方に電力事業進出をしていこうとした。水俣の方まで出向き、鹿児島県の伊佐市にある滝の水力を利用した水力発電所を作った。水力発電所で発電した電気を周辺の金山に供給するという事業を行った。1906 年に曾木電気株式会社を設立。水力発電所は金山で必要な電力量を遥かに上回る電力を発電していたため、余剰電量を活用するために海沿いに工場を建てることを計画した。最初は鹿児島県の米ノ津に工場を建設しようとしていたが、水俣が工場を誘致するために以下の条件を提示したため 1908 年に水俣に工場を建設した。

① 土地の整備をし、安く土地を提供する
② 川の水を好きなだけ使ってよい（今でも工場用水は水俣川から直接取り込んでいる）
③ 人材確保に協力する
④ 電線と電柱の費用を全て水俣が負担する

同じ 1908 年に社名を日本窒素肥料株式会社に変更。企業が発展していく過程で発電所も増築した(今でも 13 ヶ所の発電所で発電をしている)。自家発電で動力を賄っている。1 時間当たり 93,200 キロワットの出力を持っている(水俣市全ての家が一年間使う分の電力を一日で発電している計算になる)。発電した電力の内

工場では３割しか使っていない　残りの７割は九州電力に買い取ってもらっている(電力売も貴重な財源の１つとなっている)。全ての水力発電はダム式ではなく流れ込み式である(天気任せ)→会社にとっては雨の日の方がいい天気。その電気を使って物作りを始めた。今の主力製品は液晶。JNC は液晶をパネルメーカーに売っており、世界シェア 43%を占めている。国内の家電メーカーには殆ど JNC が供給しており、海外でもサムスンなどに出荷している。JNC の正門に他国の国旗があがっている時はその国の要人が来ているということである。工場から出荷する製品の殆どは粉や液体の状態で出荷する。しかし、唯一の例外が肥料で肥料だけは製品の状態まで作る。そのためパッケージに JNC という名前が掲載され、JNC は肥料の会社というイメージが持たれているのではないかと推測してい

た。JNC は水俣病の原因企業である。何故水俣病を引き起こしたのに水俣にとどまっているのか？JNC は 100 年以上水俣で創業を続けている。JNC の社員は「水俣病が教訓」と良く言う。それは「化学を過信してはいけない」ということであり、自分達がいかにいいものを作っていたとしても周りの言葉に耳を傾け、分析をしなければいけないという意味である。「良くないことをしているとわかっても方針転換をするのには大きなエネルギーが必要でそれを怠ったために大きな公害を引き起こし沢山の命を奪ってしまった」と水俣病を引き起こした原因だと考えている。被害を与えてしまった責任を取らなければならないが多くの費用と月日がかかる。JNC が行わなければならないことは２つあり、1 つめは補償という形で被害者が生きていく上で必要な費用を出さなければならない。そしてその費用を捻出するために会社を経営しなければならない。2 つめは同じ失敗を二度と繰り返さない。ことである。工場排水は環境基準以上に厳しい基準で検査しており、ＪＮＣだけでなく子会社や関連会社も共に行っている。年間 2500 人位見学に訪れる(半数以上が環境(水俣病)学習)

（担当：大久保優哉）

3.3.5　三日目午前②　市役所職員

・.鎌田さんのプロフィール

水俣市役所の職員の方。23 才で熊本に移り住み、市役所の受け付けなどを経て現在では環境推進課に所属されている。当時の年齢が熊本に来た時の２倍だと語っていた...

・過去から現在までの水俣

水俣市の地理

人口：26000 人 世帯数：12000 世帯 面積：162.88ｋｍ^2

面積は比較的広いが、山間部が全体の 75%を占めるため居住区に当てられる土地は決して広くない。ちなみに筑駒のある世田谷区は 58.08km^2

また、地名の由来となっているのは元々市内を流れていた２本の交わった川だったのだが、氾濫防止のために今では１本になっている。

高齢化率約 33%と高齢化が進んでいる(日本平均は 25%)。同時に少子化も進んでおり、市内に 2 つあった高校が１つになるなど深刻な状態にある。

・チッソ・水俣病との関わり

そもそも、水俣で営業されたチッソの工場は県をまたいで、鹿児島県出水市に建てられる予定だった。しかし、市内を流れる川など豊富な水資源をアピールした水俣市の成果が実り最終的には水俣市に建設された。

工場が稼働し始めてから暫くたつと、工場排水が原因と思われる漁業トラブルが発生するようになる。当時、チッソの技術が日本の経済成長を支えていた事もあり、国側はチッソの責任を認めず排水がそのまま流され続けた結果被害が大きくなった。

公害がチッソの排水によるものだとわかると、水銀によって汚染された水俣湾の魚や泥をドラム缶につめ、水俣湾の一部(58ha)を埋め立てた。それがエコパーク水俣で、大きな建築物をたてることができないため主にレジャー地として使われている。

・エコタウンとしての水俣

公害があったという事実は健康被害や偏見差別といったマイナスイメージをあたえる。その土地で作られ

た作物は風評被害の影響を受け、たとえ公害に関係なくとも売れ行きが悪くなる。つまり、水俣市は他の地域と同じスタートラインにたつための工夫が必要とされた。

困難な状況の打開策として、水俣市は環境面での復興をめざした。

公害により汚染されたイメージの街がエコでクリーンな街づくりをするのは、“負の個性”を逆手にとったまさに“価値の転換”であったが、水俣市全体の協力でこれを成し遂げた。

水俣市は 24 分別。ゴミの細かい分別は市復興の一つの目玉でもある。月に 1 度の全品目回収の日には、中学生が家の近所で一人ぐらしの老人達とコミュニケーションをとりつつ収集の手伝いをする。この取り組みは報道を通して街のイメージアップにつながるとともに、世代間でのコミュニケーションをとることができるというメリットがある。

・エリックさんの話

エリックさんはアメリカ出身の、市役所で働く国際コーディネーター。アメリカで起こった湾の汚染事件が原因となって、それと類似した事件として水俣病に興味を持ち日本に来たらしい。

残念ながら水俣病のことは海外ではあまり知られていない。しかし、経済的な豊かさが優先され公害の起こった街が、街ぐるみで協力して復興に努めている姿を多くの人に知ってもらいたいし、我々はこの事実を誇るべきだと語っていた。

・まとめ

経済発展の裏には犠牲が付き物。我々は「見えるもの」そして「見えないもの」を感じることが大切。興味・関心を持ち、自分の目で見ることからすべてが始まる。市の再興は、過去の過ちに学び、さらに生活者の意見のもとに行われることが求められる。

これまでに書いてきたが、一度水俣病で躓いた水俣市はその失敗をバネに環境面からの復興を目指してきた。今ではエコタウンとして認定される程になり、既に復興が成功しているといっても過言ではないほどである。

そして現在、福島の原発問題が色褪せることなく残っている。水俣病と原発問題、2 つは直接的な関係は持たないが、差別・偏見のような似た被害に悩まされていることは事実であるし、公害後の水俣の復興事業は素晴らしいものであったことから、水俣の復興事業から学び・活かせることも多いのではないだろうか。失敗からの教訓が活かされることを願いたい。そして、福島の原発問題にも水俣の復興事業から学び・活かせることが多いのではないだろうか。一見関連のないように思われる二つも、差別という共通の問題を抱えている。失敗からの教訓が活かされることを願いたい。

（担当：島田祐太郎）

3.3.6　三日目午後　歴史考証館・支援者

①歴史考証館

・はじめに

8 月 28 日、私たちは相思社の水俣歴史考証館を訪れた。水俣歴史考証館は不知火海の自然と暮らし、水俣病の被害や患者の闘い、チッソ・行政による加害行為などを記録し展示してある。

・水俣病歴史考証館の概要

ここでは、主に水俣病歴史考証館での展示内容と案内してくださった葛西さんのお話をまとめたいと思う。

水俣病歴史考証館は水俣病の歴史や水俣の地理など資料館らしい説明も多くあったが、印象が強かったのは、実際に水俣で使われたものが展示されていることであった。

まず入り口付近に見られたのは水俣の漁師が使っていた漁具である。それらの漁具は近代化されておらず、プラスチック、ナイロンなどの石油製品は使われていない。そのため、網が浮かないようにする錘は穴をあけた石をそのまま使うなど原始的な漁具であった。また漁具に並んでカーバイドの照明が展示されていた。もともとチッソは工場でカーバイドを作っていて、それを漁民らは使用し、恩恵を受けているという状況がとても皮肉に感じられた。また、カーバイドの燃焼過程でアセチレンガスができ、燃えかすが出るという。その燃えかすは水俣に埋めており、今でもそのままの状態であるらしい。

漁具の展示を通り過ぎて中ほどまで行くとネコ小屋が展示されている。これはチッソ附属病院のネコ実験で実際に使われたネコ小屋である。当時水俣病の研究

をしていた細川氏がチッソの流した純粋な廃液を 400 頭ほどのネコに飲ませたところネコが水俣病の症状を引き起こし、水俣病の原因がチッソにあると突き止めた。しかし、上から箝口令が敷かれ、外部に発表できなかった。その後辞職し、しばらくした後、肺がんを併発し、もう長くはないため、裁判の証言としてネコ実験について告発したそうだ。他には胎児性患者に関しての記述が印象的であった。水俣病の原因物質であるメチル水銀の構造がアミノ酸の構造と似ているため体がアミノ酸と勘違いしてメチル水銀を吸収されてしまうことが判明し、胎盤の中にもメチル水銀が入ることが分かった。そのため、赤ちゃんにメチル水銀が濃縮されて胎児性患者を生んでしまう結果となった。また、水俣病の治療法として対症療法しかなく、その副作用で胃に負担がかかり、胃薬を飲まなければならないなど大変な状況であったそうだ。

他にも訴訟の新聞やチッソに対する言葉が書かれた布など様々展示されていた。

・水俣病歴史考証館のメッセージ

僕は実際行って話を伺って、水俣病歴史考証館を作る上での相思社の想いを強く感じた。葛西さんのお話によると、水俣病考証館の名前の由来は、水俣病資料館にすると過去の出来事として捉えられてしまうので、今も続く水俣病について考え伝えていくという想いから考証館という名前にしたそうだ。また、HP には水俣病歴史考証館のメッセージとして以下のように書かれていた。

私たちの暮らしを問いつづけ、今も動いている水俣病事件をテーマとする限り、考証館は、単なる過去の遺物の展示館ではありえません。絶えず、聞き取りやフィールドワークなどによって資料収集を行い、それを整理・研究し、そして考証館だけでなく、機関誌発行やセミナー開催、環境学習プログラムなどを通じて発信することが、総体として考証館活動なのだと考えています。このことは、来館者にとっては、水俣病事件の記憶を刻み込んだ地域全体が本当の博物館ということです。施設としての考証館は、患者の語りを聞く、自然に直に触れる、土地の暮らしを体験する、その入り口でありたいと思っています。「このままでは俺たちは犬死だ」という患者の言葉があります。考証館は、被害者の犠牲を無駄にせず、水俣病が起こらないような世の中にするため、水俣病を「記録し伝える」ことを続けます。

これらから水俣病考証館を作った相思社は「水俣病は終わっていない」ということを伝えたいという気持ちが強いと思う。世間的に水俣病は高度経済成長期に起きた４大公害病というイメージが強く、過去の出来事であると捉えられがちだし、僕も以前はそう思っていた。水俣病は今も続いていることを伝えて、みんなに知ってもらうことの大切さを実感した。

・まとめ

僕は水俣病歴史考証館を一通り見て、水俣病の被害に遭った漁師らの生きてきた経験が初期のころから今に至るまで再現していると感じた。水俣病考証館を作った相思社が水俣病患者を支援し、一緒に闘ってきた経緯があるからだと思う。水俣病歴史考証館で、漁民の暮らしや闘いの様子など、実物が展示されていることにより、水俣病患者の苦労を身に染みて知ることができた。また、考証館のメッセージを考え、改めて水俣病は今も続いていることを実感した。日本の経済発展により恩恵を受けている中、水俣病の被害にあった方々がつらい思いをし、チッソ、行政相手に闘ってきて、現在も終わっていないことを忘れてはならず、語り伝えていかなければならないと思う。

②支援者　高倉史郎さん

・はじめに

8 月 28 日、僕たちは水俣病患者の支援を行う高倉史郎さんに話を伺った。高倉さんは水俣病患者を支援する相思社で 15 年間過ごした後、有限会社「ガイアみなまた」を設立し、現在も経営を続け、甘夏販売をしつつ、患者の支援を続けている。

・水俣病に携わる経緯

千葉県茂原市に生まれ育ち、東京大学に入学。大学卒業後、関東を出て旅をしたいという思いがきっかけで水俣病に携わることとなる。大阪、広島などを回り、1 か月ほどかけて水俣につき、そこで当時設立したばかりの相思社を訪れ、労働する代わりに、2 週間ほど無銭宿泊をさせてもらうこととなった。当時の相思社では資金集めのためにエノキダケ栽培をおこなってお

り、手伝うことになる。その後、人手不足の影響もあり、2、3か月過ごした後、相思社に携わることを決意した。

・支援していく中での出来事

高倉さんが相思社に来たとき、ちょうど水俣病患者らが不作為裁判を起こしているところであった。患者らが熊本県に水俣病患者だという認定申請をしていたが、認定の手順が多い上、申請した患者は3000人を超えていたため、熊本県の手が回らず、何年も待たせることとなり、患者らが県はなすべきことをしていないと怒り、起こした裁判である。この裁判により高倉さんは、水俣病はチッソと患者の闘いだけではなく、行政と患者の闘いもあると身に染みて感じたとおっしゃっていた。その後、患者認定申請の闘いを組織していた川本輝夫さんを応援することになった。川本さんは患者認定されていたが、社会問題としての水俣病を考え、認定されていない患者の支援をしていた方である。川本さんと協力した闘いの中で、熊本県庁の前で4か月間座り込んだこともあるそうだ。また行政との闘いの中で逮捕者が数人出るほど激しかったらしい。高倉さんも川本さんと一緒に捕まった経験があるとおっしゃっていた。水俣病ではないとして棄却された方々が異議申し立てをし、環境庁に水俣病ではないことの証拠を請求したが、開示義務があるにも関わらず、医学的説明書を見せようとしなかったため、取り上げてコピーしたことが公務執行妨害となってしまった。高倉さんは今までの経験から「交渉事をすると法律すれすれになってしまう」とおっしゃっていた。

裁判の他にも甘夏栽培において様々な苦労をしたそうだ。1998年に甘夏の注文数が非常に多く、生産している甘夏の量を超えてしまったので、自分たちの農薬基準に当てはまらない甘夏も買い取ろうとした。そこまではいいものの、販売時に「農薬基準内の甘夏です」というチラシを修正することを忘れてしまい、ラベルを詐称したことになり、信用を失ってしまった。その後、知人がいる屋久島に行こうかと思ったが、水俣病が続く水俣を離れる訳にはいかないという想いから、水俣に残り、新たに「ガイアみなまた」というグループを立ち上げ、今も経営を続けている。

・現在の水俣病に対する思い

現在も水俣病は続いており、2009年に特別措置法により、約3万人の方々が救済の対象になり、水俣病被害者（水俣病患者にすると賠償金が多額になるため、チッソは水俣病被害者とごまかした）となった。その後、新たに2012年の最高裁の判決により、その約3万人の方々とほぼ同じ条件で水俣病患者と認めるようになったが、水俣病被害者としてごまかされた方々は放置されたままである。そのことに対し高倉さんは「水俣病患者だと審査する機会を与えるべきだ。」と語った。

また、高倉さんはチッソとの交渉を今でも続けている。チッソは、2009年の特別措置法以後、JNCに事業を引き継ぎ、患者団体が1973年に結んだ補償協定証をJNCは引き継いでいないのが現状である。このまま補償問題から逃げ続けるのはおかしい話であるので、高倉さんは補償協定証をJNCが引き継ぐことをチッソに要求している。

・まとめ

高倉さんは水俣病について、相思社や甘夏栽培の話だけでなく、ミミズ栽培の詐欺にあった話から靖国神社で暴力事件に巻き込まれた話などもしていただき、とても面白かった。また、高倉さんは大変な経験をしてきており、水俣病などの問題に取り組み、闘っていくには相当大変な経験をするのだと感じた。

高倉さんの話を伺って、一番衝撃を受けたのは水俣病裁判の激しさである。四カ月も県庁の前で座り込みをしたり、交渉でのもみ合いの末、逮捕者が出るほどの争いになったりすることは想像もしていなかった。そのくらいの覚悟を持たないと水俣病の闘いを続けていけないと実感した。このような激しい裁判を経てきたが、現在も水俣病は終わっておらず、JNCの補償協定書引き継ぎの問題や水俣病被害者への待遇など問題がたくさんある。高倉さんには「ガイアみなまた」での甘夏栽培も続けつつ、今後も水俣病患者の支援をしていって欲しいと思う。

今回水俣に出向き、実際に話を伺ったことで、改めてこの水俣病の問題が複雑で奥深いと感じ、とても貴重な経験となった。水俣ゼミを通して協力していただいた方々に深く感謝申し上げる。

（記録：吉澤優人）

3.3.7　三日目夜　患者家族

私たちは３日目の夕食後、水俣病患者で漁師の杉本肇さんに宿にてお話を伺いました。

杉本さんは現在漁師の他に、水俣病資料館の語り部としての活動やお笑いコミックバンド「やうちブラザーズ」としての活動をされています。杉本さんには患者家族として経験してきたことや、市民にとって水俣病がどのような存在だったか、現在の様々な活動などについて話していただきました。

杉本さんは1961年水俣の茂道地区で代々網元だった杉本家の長男として生まれました。水俣病が発生す

るまでは多くの網子が出入りする賑やかな家だったそうですが、祖父母、父母が水俣病を発症し、患者家族として小さな頃からさまざまな苦労があったことが想像されます。一時東京で働いていましたが水俣に戻り、2008 年から水俣病資料館の語り部として水俣病の記憶を今に伝えています。

水俣病の公式確認から３年目である 1959 年に茂道地区で初めて杉本さんの祖母が水俣病を発症しました。これがきっかけで村の人々から差別を受けるようになっていき、多くの人が出入りしていた杉本家には誰も来ないようになったそうです。これは肇さんが生まれる前のことなので肇さんは祖母が水俣病であることを知らず、祖母の話が聞き取りにくいのは歳のせいだと思っていたそうです。

肇さんが患者家族としての認識をもったのは、小学２年生の時祖父が劇症型の水俣病を発症したのがきっかけでした。このときはじめて祖母が水俣病であることを知ったということから、家族にも水俣病であることを隠すまたはあえて言わないというほどに敏感な問題であったことが推測されます。劇症型の水俣病を発症した祖父は次の年に亡くなり、その後杉本さんの両親が発症しました。水俣病で亡くなった祖父を見てきた肇さんはいつ両親が死んでしまうのだろうかという恐怖をいつも感じていたそうです。

なかでも肇さんは辛い経験として、小学５年生の時に両親が両方入院してしまい兄弟たちだけで３ヶ月過ごしたことを挙げていました。水俣病について友人や学校の先生などには話せず、誰にも相談できなかったのが子供ながらに辛かったそうで、夏休みに水俣市外から大学生やボランティアの人達が患者の支援者として来てくれるのが楽しみだったそうです。その当時の支援者が今でも水俣に残り水俣病で苦しんでいる人々を支援し続けているということからも、水俣病はまだ終わったわけではないといえるのではないでしょうか。

杉本さんの話の中で一番強調されていたのは、「水俣病の一番の苦しみは差別であり、水俣病は差別の歴史である」ということです。水俣病患者・患者家族と、それ以外の市民との間での水俣病に対する認識には大きな差があり、患者・患者家族は辛い差別を受けていました。中には水俣病の子供を押入れで隠して育てたひとがいたほど、患者・患者家族であることを隠そうという風潮が強かったそうです。どんなに水俣病の症状が辛いとしても、人間の尊厳を奪われる苦しみほど辛いものはないと思います。我々は水俣病からさまざまなことを教訓として学ばなければいけませんが、患者家族として差別と向き合ってきた杉本さんが一番伝えたい、伝えなければならないと考えていることはやはり「水俣病は差別の歴史である」ということなのだろうと思います。

もし水俣病において周囲からの差別がなかったとすれば、患者・患者家族が人としての尊厳が傷つけられることもなかっただろうし、患者がより声を出しやすくなっていて水俣病の問題が長期にわたって放置されることなくより早期に対処され、解決されていたかもしれません。しかし杉本さんも言っていましたが、このような問題において差別が完全になくなることは不可能だと思います。だからこそ私たちに求められているのは水俣病の差別の歴史を検証し、もし同じような問題が起きた時に差別という人災をどうやって最小限にするかを考えることなのだと思いました。

（担当：澤山　健）

3.3.8　４日目午前　ジャーナリスト

熊本日日新聞の農孝生氏にお話を伺い、ジャーナリストから見た水俣病という点を掘り下げた。

・水俣病問題の現状

水俣病は公式確認から 58 年、排水停止からも 46 年経った現在でも終わらない問題である。

患者救済の歴史は古くは 1959 年の見舞金契約まで遡る。また同じ年に厚生省が水俣病審査協議会が設置し、水俣病の認定制度が始まっている。その後第一次訴訟を経て 1977 年に政府によって後天性水俣病について「指肢末端の感覚障害に加え、視野狭窄、意識障害など他の症状があること」という基準が示された。しかし、この基準は医学的な見地に立つと漏れの多い基準であり、患者を少なく見積もるための極めて政治的な基準であった。

その後未認定患者の訴訟が相次いで発生し、これに対して政府は「政治決着」という形で幕引きを図った。その条件は、未認定者を「水俣病被害者」として認定し、原因企業チッソから一人当たり 260 万円の補償金と国や県による医療費の無償化を行うというものであった。この中で国や県の責任については認められていない。しかし、この政治決着では未認定者を水俣病としては認定していない。また認定患者は一人当たり 1600 万円が支給されているということからもここに新たな差別の火種が存在していると言える。

この政治決着によってほとんどの訴訟が取り下げられたが、唯一関西訴訟が行政の責任について争い、訴訟が 2004 年まで続いた。そして最高裁で、水俣病にお

ける行政の責任を認め、症状の一部しか有しない者に関しても補償の必要性を認める判決がなされた。これによって再び補償金を求める人が続出した。

そしてこれを受けて 2009 年に水俣病特措法が成立し、新たな申請に関しては一時金 210 万円と療養費を支払うこととされた。申請は 2012 年に締め切られ、2014 年に発表された補償の一時金の対象者は 30433 人であった。

まず水俣病認定制度の欠陥として、あくまで行政が行うのは患者の認定であり、患者の掘り起こしは行っていないという点である。このため、患者は自ら名乗り出て補償金を受け取る必要があったが、差別を恐れて水俣病患者であることを名乗り出るのをためらう人も多く、このことが水俣病の被害の全体像の把握をより難しくしているといえる。

そして、後付けで図った政治決着が限定的な補償であるということを考えると、この受け取る補償金の差や認定を受けられるかどうかが患者間の関係悪化につながる可能性を否定できないし、また水俣病であると認定されるか否かという点は患者の精神的な水俣病との決着においても重要であり、問題のある方法であるといえる。

さらに、チッソは事業会社を JNC として分社化しており、「チッソ」という水俣病の原因企業としての名前が時間とともに消えていくという批判もある。実際に、既にチッソの一時金の支払いはピークを過ぎて黒字化を達成している。

・科学がどのように利用されてきたか

水俣病では科学が都合の良いように利用されてしまったというのも事実である。

まず水俣病の原因物質の特定に関して、東工大の教授が発表した有毒アミン説、日本工業協会が発表した旧日本軍の爆弾説などの根拠の希薄な学説、さらに再反論の作成などのために 1968 年までかかってしまった。チッソの工場からの排水が中止されたのはこれを受けてのものであることから、科学という権威の濫用が原因の特定を遅らせたという点は否定できない。

さらに水俣病の認定に関しても、認定審査会に医者が参加しており、第三者の医者から見れば明らかに政治的な認定基準でも、医者が認めたとすることによって権威付けを行っている。このことが患者の切り捨てに加担しているということを考えれば、科学者にも水俣病認定問題の責任の一端はある。

科学は真理を追究していくものである。一方で、厚生省の初代公害課長の橋本道夫氏が「科学は諸刃の剣。原因究明にも役立つが、邪魔をするのにも使える」と述べているように、専門家は一般的に正しいことを言っていると思われており、社会とのかかわりの中で、この印象を利用することによって多少間違ったことでも科学という権威を借りて信憑性を上げるという手法は存在する。科学者はこれらの風潮に迎合せず、真理を貫いていく姿勢が重要である。

・ジャーナリズムの役割

そもそもジャーナリズムとは何か。広辞苑を引くと「新聞・雑誌・ラジオ・テレビなどで時事的な問題の報道・解説・批評などを行う活動」とある。ここでジャーナリズムの役割は「報道・解説」だけでなくその「批評」も求められていると解釈できる。

もちろん「報道・解説」を生業にしている以上、記者の都合のいいように事実を歪曲することは断じて許されることではない。しかしながら、ある立場に立たなければ「批評」を行うことは困難であり、記者の主観は必要なものである。

ここで「報道の中立性」という点について考えると、「強者」と「弱者」の中間に立とうとすると強者の側に引き寄せられてしまいがちである。このことから、あらゆる事件に関しても弱者の立場に立った報道も必要であり、これが社会におけるジャーナリズムの役割の一つであると結論付けたい。

水俣病においてジャーナリズムはその存在を周知するという役割を果たしてきた。ただ情報を知る手段としてその影響力は絶大であり、科学者と同様に強者に迎合してしまう可能性は否定できない。ジャーナリストは細心の注意を払い、これを防いでいくことが重要である。

（担当：野間裕太）

4　実習を終えて

4.1　実習後のゼミ

第４～６回：　水俣実習のまとめ

〈９月 20 日〉〈10 月４日〉〈11 月 15 日〉

実習で得られた成果を３回のゼミの時間を使ってまとめた。フィールドワークは記憶が薄れないうちにまとめることが肝要だが、今年度の生徒は早めに取り組むことができた。それぞれの分担を発表し、内容について皆で検討し、よりよいものに仕上げていった。

第７回：　経験の共有―ゼミナールオープン

〈１月 10 日〉

中学生にゼミナールを公開することで、将来への学習の動機づけを行うという企画で、毎年行われている。

今年度は昨年度の反省を踏まえ、中学生に向けて発表するという趣旨で、周到な準備を行った。

しかし､思った以上に参加してくれる生徒が少なく、やや拍子抜けであった。中学生向けに内容を工夫していただけに、悔やまれる結果である。来年度以降は宣伝に気を配るなど、多くの中学生の興味を引くよう心掛けたい。

第８回：　報告書校正〈1月 24 日〉

報告書用原稿を皆でチェックし、最終的な構成の時間に充てる予定である。

5　まとめと今後の展望

生徒の報告書に各人が記した内容から、このフィールドワークが彼らにとって有意義な活動であったことは窺い知ることができる。様々な立場の人々の話はそれぞれに対立する部分もあり、この水俣病をめぐる問題の奥深さについて実感することができたのであろう。何人かの生徒は、この水俣病から他の社会問題を考える契機を得ようとしているし、現在の自分のものの見方を批判的に検討することの重要性を認識し始めている。それだけでも、この学習の意義は十分にあったと言えよう。

さらに重要なことは、水俣という公害を生んだ地において、あるべき社会について真剣に考え、行動する多くの大人に出会ったことである。ある話題におよんだ時の話し手の気迫に圧倒され、その生きざまを語ってもらった生徒たちの真剣なまなざしは、傍らにいて強く心を打たれたものであった。

水俣というフィールドは、環不知火プランニングのコーディネートや話し手の皆様の熱意により、非常に学びに適した場所である。教育的な効果も十分に見込める場所であるが、震災と原子力発電の問題等、科学と社会の在り方を学べる新たなフィールドを開拓していくことも望まれている。この点を今後の課題としたい。